

# ふれんどりーたま

FRIENDLY TAMA VOL.

139

2022  
秋号



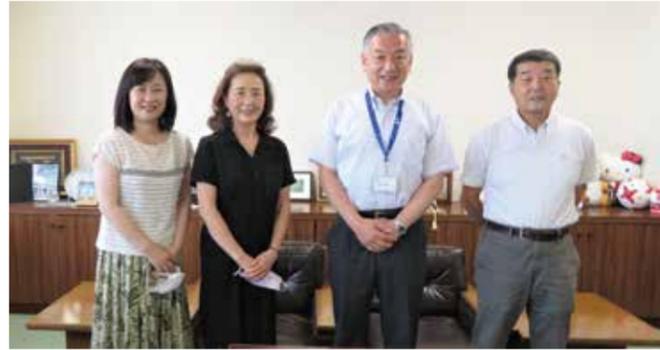
多摩市国際交流センター

# 市の情報の多言語化や外国人のニーズの把握に力を入れています

令和4年8月8日

## 阿部多摩市長インタビュー

TIC(多摩市国際交流センター)広報部: 竹内、呉、最上



**最上** ▶ 本日はお忙しい中、時間をいただきましてありがとうございます。

さて、多摩市長として4期目に入りましたが外国人に対する施策について、外国人の市政参加も含めて以前と変わったこと、或いはこれから実行しようとしていることがありますでしょうか。

**市長** ▶ どこから話したらいいかわかりませんが、インバウンドにより、この10年で大きく変わりました。多摩市としては、インバウンド対応として一つにはWi-Fi(ワイファイ)設置により外国人が容易に情報を入手できるようにし、多摩センター駅前などWi-Fiの拠点作りに力を入れました。その他、電光掲示板の設置やコロナ対応では今年に入ってから行政文書や案内などをTICの協力も得て、7か国語(英語、中国語(簡体字、繁体字)、韓国語、ベトナム語、タガログ語、やさしい日本語)の多言語化をはかりました。この他に、タブレット通訳では13言語に対応し、この6月から導入しましたし、職員に向けてはやさしい日本語の研修会も実施しました。

また、東京オリンピックのアイスランドとのイベント企画、台湾のバドミントンチームとの交流などが中止になったのは非常に残念でした。2020年以降はコロナ禍で対応に追われていますが、ワクチン接種情報の多言語翻訳や、防災、ごみ分別のモバイルバッテリーなどの注意の記事掲載などTICの外国人対応の情報提供にはとても感謝しています。

**竹内** ▶ 市内の外国人の生活意識やニーズに関してTICには英語での市役所窓口対応ができないなどの不満や、委託事業としてTICが行っている小・中学校の適用指導でも日本語の授業が35回ではとても足りないという問題があります。市としては今後外国人の生活意識やニーズの調査を実施する計画はありますでしょうか。

**市長** ▶ 今後、市内在住の外国人の皆さんを対象にアンケート等を実施して、日常生活で困っていること、子どもたちの学びのことなど、現状をきっちり把握していきます。誰一人とり残さないという施策を掲げているので、市としても努力していかなければなりません。

**呉** ▶ 外国人は言葉の問題で自分からうまく発信できないし、言われても分からないことがあります。メールなどで英語での問い合わせが出来れば相談しやすくなるのではないのでしょうか。

**市長** ▶ 例えばゴミの分別の問題などは日本人の間でも簡単ではないので初めて日本に来た外国人には理解してもらうのがなかなか難しい。しかし、住民税や固定資産税などをいただいているので市としてもしっかり説明をして理解をしてもらうことが必要です。また市の窓口は縦割りの組織になっているので、ご相談の内容によっては直ぐに回答できる態勢にありません。外国語については、まずはタブレット通訳を利用いただき、メールでの対応も検討していきます。

**最上** ▶ 次にTICの位置づけですが、他の市区町では我々TICのように完全にボランティアだけで運営しているということではなく、行政が中心になって外国人対応・国際交流事業を実施しています。その辺のところはいかがですか。

**市長** ▶ 多摩市としても国際交流事業はいろいろやっていますが多摩市に住んでいる外国人の皆さんをより理解し、市との間に入っていただくという努力をTICの皆さんにいただいています。TICが多摩市にあることを私は誇りに思っています。

**竹内** ▶ 都には区や市の国際交流協会などが集まる国際交流団体連絡会というのがあって、私も出席しています。どの団体も市などの行政が関わってボランティアと事務方は別になっています。ところがTICでは事務局がすべての業務をし、更に例えば日本語セミナーの中ではボランティアが文集、スピーチ、会計などを担当しています。それはそれで楽しいこともありますがやはり防災などの問題では任意団体である我々は市と離れているのでなかなか実施が難しいところがあります。

創立当初は市の方が専門部の定例会などに出席し、ボランティアの話を聞き、予算を提示していただきましたが平成17年から全てをTICでするようになりました。スタッフの確保もなかなか難しく、出来れば事務局長は市の方に来ていただき、ボランティアスタッフが一緒に仕事をする形にできないか考えていただきたいと思います。

**最上** ▶ 市長が言われたようにボランティア団体であるということ自体は素晴らしいことだと思いますがこれから外国人も増えて来て、その対応業務も増えてくるとボランティアのスタッフだけでは団体の存続そのものが難しくなってくると思います。是非市の職員も中に入って運営に関わっていただきたいと思いますが如何でしょうか。

**市長** ▶ 確かに今はTICの皆さんにおんぶにだっこ状態だと思います。外国人の多い市などは日常生活に関する全てのサービスを行政で実施しているところがあります。勿論ボランティアだけで済む問題ではなく、多文化共生、ダイバーシティが当たり前になってきている中で多摩市もやらなければならないと思っています。どのようなやり方がいいか、いろいろな市民団体があるのでしっかり考えないといけません。特に多摩市の場合は自治会の組織率が低く、外国人の方が地域で孤立化し易い状況にあると思うので、市もサポートを真剣に考えないといけません。4期目の取組みとして気候変動問題の対応と地域共生社会の実現を大きく掲げており、地域職員担当制などをしっかり導入していかなければならないと考えています。勿論その中には外国人対応も入っています。

**竹内** ▶ 話は変わりますが、アイスランドとは友好協力関係に関する覚書を締結していますが、今後はどのように進めていく予定でしょうか。

**市長** ▶ 昨年度からアイスランドウイークとして多摩センターで事業を実施したほか、ゆう桜ヶ丘にアイスランド大使を招き、講演会を開催しました。来年以降も引き続いて多摩センターでアイスランドの写真や書籍などの紹介や特産品のラム肉や乳製品のイーセイスルなどの販売をして交流を更に深めたいと思っています。

**最上** ▶ 逆にアイスランドには多摩市のことがどのように伝えられているのでしょうか。

**市長** ▶ アイスランドでも日本大使が政府に対して、多摩市の紹介をしています。何しろ全人口が34万人と少ないので多摩市のことを少しは知っていただいているかなと期待しています。また、双方の教育委員会で協力して子供たちのオンラインでの交流など具体化したいと思います。

**竹内** ▶ アイスランドと日本は火山国で温泉が多いとか直接蛇口から水が飲めるとか共通点も多いので親しみやすいですね。子どものアイスランド大使館訪問も機会をみて実施したいと思っています。

**呉** ▶ 中国では公園とか団地の中などにお年寄りも簡単に運動出来る健康遊具がいっぱいあります。多摩市の公園の遊具は多くが若者向けです。お年寄りでも簡単に体を動かせるものがあるといいと思います。中央公園などに、是非作っていただきたいです。

**市長** ▶ 多摩市で健康遊具を導入している豊ヶ丘南公園、乞田・貝取ふれあい広場公園など全部で9か所あります。健康遊具だけでなくバスケットのコートやお子さんでもできるロッククライミングの施設などの要望もあり、皆さんの意見を聞きながらそれぞれ特色のある公園作りを目指しています。中央公園についてもインクルーシブ公園として障害のある方や小さいお子さんでも遊べるような公園や雑木林をそのまま活かした公園なども計画しています。

**呉** ▶ 東京都の中でも多摩市は公園が多いので、皆がいろいろなことをして楽しめる公園を期待しています。

**竹内、呉、最上**

▶ 今日は外国人対応だけではなく、TICのあり方や、国際交流についてもいろいろお話をいただきありがとうございました。





教室にて成績証明書を配るところ

## ポーランドの学校

菊池 マウゴジャタ (ポーランド)



## SCHOOLS IN POLAND

Małgorzata Kikuchi (Polish)

こんにちは。私の母国ポーランドをテーマにし、少し書きたいと思います。毎年、6月20日前後の金曜日に学校の修了式(卒業式)が行われます。今年は24日に行われました。学校により、卒業式が5月に行われ、6月には修了式が行われることもあります。5月から6月にかけて、子供たちは集中的に勉強します。なぜかという5月後半と6月前半は、成績評価が決まる時期だからです。(1月中旬に1学期の成績評価が決まるので12月、1月も頑張ります。それ以外の月はそうでもないかもしれません。笑)

終了式の日、生徒および先生はまず体育館に集合します。体育館は前日からきれいに飾られ、壁には夏休みにちなんだ言葉が書かれた紙や絵が貼られています。式典のために、先生はエレガントな服装を召し、生徒は白いブラウスに黒か紺のスカートまたはズボンをつけます。ポーランドは学校の制服がありません。セレモニーの冒頭、生徒代表(通常は3人)が校旗を持って体育館に入場する間に、全員は起立し校長の挨拶に聞き入ります。国歌も演奏されます。校歌がある学校は、それも演奏されます。

体育館での式典が終わると、生徒たちは教室に移動します。そこで先生とお別れをします。成績優秀者には、ポーランド国旗(白と赤のライン)入りの成績証明書と頌詞の書かれた本が贈られます。他の生徒には、ポーランド国旗のついていないものが渡されます。【国旗色ライン入りの証書は小学校4年生以上の生徒に授与されます。】

学校や幼稚園にもよるが、幼稚園児や小学校3年生までの子どもたちは、学年末に夏休み関連のパフォーマンスや演劇を行います。それには、先生も保護者も参加するケースもあります。修了式(卒業式)後、生徒たちは下校します。その瞬間から9月1日までは夏休みです。

大学生の場合、5月中旬に試験に合格すれば6月から夏休みに入ります。10月1日までです。

夏休みの間、学校は閉まっています。先生も休みです。(なのに悩む先生が多いです。向こうと比べたら、日本の先生のほうがずっと大変だと思います。また、日本の先生には責任感があるので、大学に関しては、開いてはいるが、授業は行われません。



教室にて夏に関するパフォーマンス

Hello. I would like to write a little on the subject of schools in my home country, Poland. Every year, school completion ceremonies (graduation ceremonies) are held on the Friday that falls on or around June 20. This year, they took place on June 24th. Some schools hold their graduation ceremonies in May, followed by a completion ceremony in June. Children study intensively during May and June because it is during this period that their final grades are determined. (They work hard during December and January too, because first semester grades are finalized during the first month of the year. They may be not as assiduous during the other months, mind you. Laughs.)

On the day of the closing ceremony, students and their teachers gather in the gymnasium. The gymnasium will have been beautifully decorated on the day preceding the ceremony – its walls covered with papers and pictures with words relating to the summer vacation. Teachers dress up elegantly for the ceremony, whilst students wear white blouses with black or navy-blue skirts or trousers. School children in Poland are not required to wear uniforms. At the beginning of the ceremony, when the student representatives (of whom there are usually three) enter the gymnasium carrying the school flag, all stand and listen to the principal's address. The national anthem is also performed, and if the school has a song that will be played as well.

After the ceremony in the gymnasium, students move to their classrooms. Here, they say goodbye to their teacher. The top achievers will receive certificates of achievement adorned with the Polish flag (two vertical stripes in white and red) and a book containing words of praise. Other students receive certificates too, but without the Polish flag. [Certificates with the flag color line are awarded to students in the 4th grade of elementary school and above.]

At some schools and kindergartens, kindergartners and children in grades one through three will give performances on summer holiday-related themes at the end of the school year. In some cases, both teachers and parents also participate in these performances. Following the completion ceremony (graduation ceremony), the students are discharged from school. From that moment until September 1st, it is summer vacation.

For college students, if they pass their exams in May, they start their summer vacation in June and are free until October 1st.

Schools are closed during summer vacation. Teachers are absent, too. (And yet, many Polish teachers complain. I think Japanese teachers have it much harder than their Polish counterparts. Also, Japanese teachers have a strong sense of responsibility.) As for universities, the campuses are open but no classes are held during the summer months.



## 多摩市の魅力を再発見

朱 俊華《中国》



## REDISCOVERING THE CHARMS OF TAMA CITY

Zhu Junhua (China)

今年3月の終りごろ、息子が中国から来て、一緒に住むようになりました。それまでは多摩市はただ住むところとして、静かな町だと思っていましたが息子が来てからは、魅力のある街と感じています。

まず街が美しいです。もう一年以上住んでいるので多摩センター周辺は大体わかっていますが、そんなに特別だと思わなかったのです。その特別な美しさはアニメで知りました。息子が来た3月26日午後ココリアに買い物に行った時、ココリアのビルの手前に立って、「ここだ!すてい!」と息子が喜びました。なんとそこはアニメの「とある科学の超電磁砲」の中の背景だったのです。息子が興奮しながら、それを紹介してくれました。他にもまた三、四カ所、アニメの風景と同じ場所を発見して、大興奮しました。街を歩きながらアニメの画面を思い出し、道、橋、ビル、そして階段、緑などが組み合わせられた風景の美しさを存分に楽しんでいます。

多摩のもう一つの魅力は食べ物がおいしいことです。ある日息子に「東京に来て一番印象深かったのはなに」と聞いたら、「食べ物がおいしい」と答えたので、驚きました。私はそこまで考えていなかったからです。なるほど、多摩の食べ物は本当においしいですね。野菜も果物も肉も新鮮で美味しい、お弁当もいろいろの種類があって、見ても食べてもいいです。季節によって種類も変わり一年中あきません。これまでは一人暮らしでいつも簡単な中華家庭料理を食べていたので食べ物の美味しさに気づきませんでした。

それから公園です。鶴牧西公園は家のすぐそばで以前からよく利用していました。でも息子が来てからはもっと楽しく感じるようになりました。まず虫です。私は気づきませんでした。虫好きの息子はすごく興味を持ってすぐに虫を見つめます。タンゴ虫は珍しくないけど、私は面白い虫だと思います。そして黒い蝶々、精霊バッタなどなど、名前を知らない虫もいます。晴れた日は、蜥蜴を見たり、四つ葉のクローバーを探すのも楽しいです。近くの公園にはどこでもクローバーがあり、行けば必ず四つ葉探しをします。息子は何回も見つけています。私は6月25日初めての四つ葉を見つけました。とても幸せです。

息子が来てから多摩市の魅力にたくさん気づくことができました。多摩生活もあと7か月です。いい思い出をいっぱい出してくれるように日々を味わっていきたくと思っています。

Towards the end of March this year, my son came from China to live with me. Until then, I had thought of Tama as simply a quiet place to live, but since my son arrived I have come to see the attractions of this town.

For a start, Tama is a beautiful neighborhood. I have lived here for over a year now, so I know most of the Tama Center area but I didn't think it was that special. My son arrived on March 26, and that afternoon we went to Cocolia to shop. He stood in front of the building and said, "Wow! This is it! How cool!". He was quite overjoyed. To my surprise, I learned that Cocolia was the backdrop in the anime series "Toaru Kagaku no Railgun" (A Certain Scientific Railgun). This, my son related to me in great excitement. He was thrilled to discover three or four other places that were identical to the scenery in that anime. As we walk through Tama Center, he recalls scenes from the series and takes huge pleasure in the beauty of the scenery with its combination of streets, buildings, stairways and greenery. Another attraction of Tama is its delicious food. One day, I asked my son, "What's impressed you most since coming to Tokyo?". He surprised me by saying, "the delicious food." I hadn't really thought about it, but I agree, the food in Tama is really good. The vegetables, fruit and meat are all fresh and delicious, and there is a wide range of bento boxes that both look and taste delicious. The selection changes with the seasons, so there is never a dull moment. Before my son arrived, I was living by myself and always ate simple Chinese home cooking, so I didn't realize how good the food is here.

Then there are the parks. Tsurumaki West Park is right next to our home and I'd often used it even before my son came to Tokyo. But since his arrival, I enjoy it even more. For a start, there are lots of insects. I hadn't noticed them, but my son, who loves bugs, is fascinated and finds insects everywhere. Pill bugs (woodlice) are not unusual, but I find them interesting. There are also insects that I don't know the names of, such as black butterflies and Chinese grasshoppers. On sunny days, it's fun to look for lizards and four-leaf clover. The local parks are full of clover and whenever we go we always hunt for four-leaf clovers. My son has found several. I found my first on June 25 and I was over the moon.

Since my son arrived, I've become aware of the many charms of Tama City. We'll be here for just seven more months. I want to savor every day so that I can create many good memories of this wonderful place.



## TIC となって 30 年。今、ほしいもの

代表 太田 恵美子

私が初めて“ガイジン”を「見た」のは中学2年の時。ロシア人女性だった。圧倒された。白い豊かな髪、青い目、高い鼻、堂々たる振る舞い……。男子たちは胸の大きさにどよめいていた。東北の片田舎でテレビも普及していない頃のこと、紹介する教頭の紅潮した顔を思い出す。あれから半世紀、世界はグローバル化し、ガイジンは珍しい存在ではなく、共生するパートナーとなった。私自身も旅先で、仕事で、そして娘が国際結婚したこともあって、ようやく“慣れた?”ような。ふり返ると隔世の感がある。

日本語部門は、そうした時代の流れをいち早く嗅ぎとった市民有志が「多摩市国際友好クラブ」として生活上必要な日本語を教えたのがきっかけと聞く。昨今のコロナ禍で多少減少したものの、現在も90名の学習者を62名のボランティア（5月集計）がサポートしている。私は、というと、「日本語で日本語を教える」という言葉に飛びついて活動を始めたのはいいが、学校で学んだ「国語」と『日本語』の違いに？マークが渦巻くばかり。しかも、授業内容は学習者の希望に沿うことが原則。テキストに従って一斉授業するより知恵がいる。それでも、学習者を通して垣間見る世界は興味深く自己満足していた。が、ある大先輩が、「ボランティアはしゃべりすぎない（学習者6；ボランティア4）」と話すのを聞いてハッとした。伝わったかどうか不安で、やはり、しゃべり過ぎている。まだまだ「ひよっこ」だ。ボランティアは各個人の力量に任されている部分も大きく、正直心細い。研鑽を積みつつも気軽にアドバイスを受けられる環境が必要だと思うが、現状の5クラスに分かれた借り上げスタイルの教室では、授業が終わると即退室しなければならず、雑談する場がない。特に学習者は、担当ボランティア以外、他の学習者やボランティアと接する機会はイベントがなければ皆無とっていい。これでいいのだろうか。かつては、「おしゃべり会」と称した学習者同士のネットワークがあったという。

「交流」とは交わる、多方向発信であることだ。私は、それが自然に日常的にできるスペースがほしい。図書館とカフェを合わせたような空間で壁には活動記録や教材が並び、よろず相談窓口、事務局、隣の部屋では日本語や外国語のセミナーが日替わりで開かれている……。モノや情報が1か所に集約されれば、ボランティアの交流も学習者同士の出会いも増える。TICとなって30年。多摩市で暮らす外国人は3000人近くになった。そろそろ国際都市にふさわしい形に市も本腰を！ 市長、期待していいですか？

## THREE DECADES OF TIC: WHAT WE NEED TO KNOW

Emiko Ohta, Representative

The first time I saw a *gaijin* (foreigner), I was in my second year of junior high school. She was a Russian woman and I was completely dumbfounded. She had long, flowing blond hair, blue eyes, a long nose, and a regal demeanor. The boys, meanwhile, were thrilled by the size of her breasts. This was in the rural Tohoku (northern Japan) area at a time when television was not yet widely available, and I remember our vice principal flushed scarlet when he introduced her to us. In the half century since this encounter, the world has become increasingly globalized and so-called *gaijin* are no longer an uncommon sight but have become neighbors with whom we coexist. After traveling, working and my daughter's international marriage, I myself am finally "accustomed" to this reality. Looking back, that time feels worlds away.

As I understand it, the Japanese language department at TIC was started by a group of citizens who were quick to recognize the trend of the times; they established the "Tama City International Friendship Club" and taught foreigner residents the Japanese necessary for daily life. Although the number of students has decreased somewhat as the result of the coronavirus pandemic, the program still supports 90 students with 62 volunteers (as of May 2022). I got involved having jumped at the chance of "teaching Japanese in Japanese", but I was left with a whirlwind of questions about the differences between "Japanese" and the *kokugo* (national language, i.e. Japanese) that I learned at school. What's more, the contents of these classes should, in principle, be tailored to the wants of our students, an approach that certainly has more to recommend it than teaching group lessons from a standard text. Still, the worlds glimpsed through the students were fascinating and I was quite satisfied with my work. I was thus surprised to hear a senior volunteer say, "Volunteers shouldn't talk too much" (6 students, 4 volunteers). I wasn't sure if I'd got the message straight, but I was certain that I was talking too much and realized that I'm still a "novice" at this job. Volunteer work is left largely to the capabilities of individual volunteers and, to be honest, that can be a little disheartening at times. In my opinion, we need an environment in which students can get advice whilst devoting themselves to their studies, but with the current set-up – five classes spread across different rented classrooms – students have to leave immediately after class and there is no place to chat. Also, students have no opportunity to interact with other students or volunteers – aside from the volunteer in charge of their class – unless we hold a special event. Apparently, there used to be a network of so-called "chat groups" among the students, but this no longer exists.

"Exchange" means interaction and multidirectional communication. TIC needs a space where this can happen naturally and routinely. A space that looks something like a cross between a library and a café, where the walls are lined with activity records and teaching materials, there is a general consultation desk, an office, and an adjacent room where Japanese and foreign language seminars are held on a daily basis...If learning tools and information can be consolidated in one location, there will be more interaction among volunteers and more encounters among students. TIC has been in existence for thirty years now and today there are almost 3,000 foreign people living in Tama. It's time for Tama to get serious about becoming an international city worthy of that name. Can we count on you, Mr. Mayor?



## 日本人の視線

JAPANESE PERSPECTIVES ON LIFE ABROAD

日本人が外国に行って初めて気づく日本との習慣との違いや驚き戸惑いは何でしょうか。  
In this issue, Japanese people share their experiences living abroad.

## 何でもありのゆったりラオス暮らし

児玉 郁子 (外国語セミナー タイ語)

村上春樹が『ラオスにいったい何があるというんですか?』を出版したちょうどその頃、夫の仕事で帯同した首都ビエンチャンで、ラオスの魅力にどっぷり浸っておりました。確かにラオスには、これといって目を引くようなものは何もなかったけれど、夕暮れ時になるとメコン川のほとりにブラブラ出てきて体操やら夕涼みやらを楽しんでいるラオスの人々を眺めていると、不思議とこの国に流れている緩やかで強かなリズムがだんだんと心地よくなってきます。そんなのんびりしたラオス暮らしの中で、私が出会った愉快な一面をご紹介します。

ラオス人は控えめで静かな国民性ではありますが、パーティーでは結構盛り上がります。その大きな理由の1つは、女性もためらわずお酒を飲むからではないか、と勝手に思っているのですが、お隣タイに比べるとその辺りはかなりオープンな感じがあります。「ビールを飲みに行きましょう!」という言葉が女性同士で挨拶代わりに交わされることもしばしば。パーティーで食べて飲んでおしゃべりした後は、お楽しみのダンスタイムです。まずは男女ペアになっての伝統民族舞踊(ラム・ヴォング)から始まり、女性だけのステップダンス(バサロップ)へと続きます。壁の花になる女性なんていないところがラオスのパーティーのいいところ。しかしながらこのバサロップ、テンポはそんなに早くはないのですがステップが結構難しい。「これをマスターしたら、いい運動にもなるし一石二鳥だ」と勢い余って芸術学校の門を叩いてみましたところ、あっという間に日本公演にも参加したことのある民族舞踊の大先生にレッスンを受けることになってしまい、さあ大変!筋肉痛になりながらもやっとならぬ曲が踊れるようになった頃、先生に「なかなか踊る機会がなくて…」とつぶやいたら、「じゃあ、来月この学校で職員の結婚式があるから来たらいいわ。そこで練習成果を披露しましょう。」と断りしたのですが、



「私と一緒にんだから大丈夫よ、考えといてね。」とのこと。ラオスでは、こんなことは十分「あり」のようでビックリです。

こちらのちょっとした思いをさらに受け止めてくれる懐の深さ。ラオスは何もないけれど、実は「何でもあり」の不思議な国だと思うのです。



## A LEISURELY LIFE IN LAOS WHERE ANYTHING GOES

Ikuko Kodama (Foreign Language Seminar - Thai)

By chance, my husband was working in Vientiane, the capital of Laos, when Haruki Murakami's travel essay, "What is There in Laos" was published, and since I had accompanied him I was thus fully immersed in the charms of the country. There was certainly nothing in Laos that grabbed my attention, but as I watched the Lao people lounging on the banks of the Mekong River at dusk, enjoying gymnastics and the cool of the evening, to my surprise, I found myself growing more comfortable with the gentle, strong rhythms that flow through this country. What follows is an account of one of the pleasant surprises I encountered during my time living in the laidback country of Laos.

Laotians are a quiet, reserved people, but they get quite excited at parties. One of the main reasons for this, I believe, is that the women are not afraid to drink alcohol, something Laos seems to be much more open to, especially when compared to its neighbor, Thailand. Women frequently greet each other with a call of, "Let's go have a beer!", and at parties, the eating, drinking and chatting is followed by dancing – the fun part of the evening. This starts with the famous Lam Vong – a traditional folk dance, which is danced by men and women in pairs, followed by the Bah Salop, a popular line dance that is performed by women. This is one of the real beauties of Laos parties: no woman is forced to be a wallflower. However, whilst the tempo of the Bah Salop is not particularly fast, the steps are quite difficult. Thinking that, "If I master this, it will be good exercise and I can kill two birds with one stone", I knocked at the door of a local art school and in no time was taking lessons

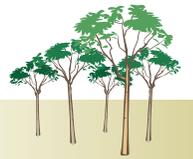
from a great folk-dance instructor who had taken part in performances given in Japan. Well, my goodness! When I was finally able to dance a few songs even in spite of my aching muscles, I murmured to my teacher, "I just don't get a chance to dance very often...", to which he replied, "Well, one of our staff members is getting married next month. Come to the wedding party and you can show off what you've been practicing". "I can't do that", I protested. "I can't show up at a stranger's wedding simply because I want to dance!" But he replied, "You're with me, it's quite alright". I was surprised to learn that this type of thing is really quite common in Laos.

This generosity in response to what was essentially a whim of mine really struck a chord with me. There may be nothing in Laos, but I found it to be a magical country where "anything goes".





うご  
**グラフ・TICの動き**  
 TIC activities by photos



3/27 春の散策・お花見交流会  
 Enjoy walking in Spring / Ohanami



5/28 第18回TIC定期総会  
 The 18th TIC General Meeting



VITAふれあいまつり 8/7  
 外国語であいさつ「インドネシア語・タイ語」

Fureai Festival: Greetings in Thai and Indonesian languages



7/29~8/31

外国語夏期講座  
 「スペイン語」  
 Foreign Language  
 Summer Class: Spanish

日本の詩歌  
 Japanese poetry



9/11  
 国際理解講座「ミャンマー」  
 Lecture on International Understanding : Myanmar



編集後記

10月に入ると一気に秋らしくなってきます。今年もあちこちで豪雨があり、台風もまだいくつか日本上陸となる事でしょう。世界に目を向ければロシアのウクライナ攻撃もまだまだ終わりそうにありません。様々な困難に立ち向かいながら、人々はいつも精一杯の努力をし、日々の生活を続けています。SDGsの17の目標をご存知ですか。夢のような目標ですが、いつかは目標に到達できるように、小さなことを実行していきましょう。

Editor's Note

We feel autumn is coming as soon as October begins. As it has happened these few years, torrential rain hit some regions in Japan and typhoons will come this year. As one of the global matters, Ukraine has been come under attack by Russia. Though being under the severe situation, most of the people try to keep their lives. Do you know "17 aims of SDGs"? They are a kind of dream goal. But we'll do our best to reach the goal someday.

多摩市国際交流センター  
 〒206-0011 東京都多摩市関戸4-72  
 ヴィータ・コミュニティー7階 TEL 042-355-2118  
 FAX 042-355-2104  
 発行：広報部 代表 最上 勉  
 編集 竹内佳代子  
 翻訳 ウェイド アマンダ  
 2022年10月10日発行

\* 当会報へのご意見ご希望をお寄せ下さい。  
 \* また、当会報は、別紙でハングル版と中国語版が、用意されています。ご希望の方は、上記までご連絡下さい。お送りします。

(表紙：ロボドゥール寺院 インドネシア 画：石黒 寧)

Tama City International Center (TIC)  
 We look forward to any comments, suggestions and topics. This newsletter is also translated into Korean and Chinese and is available upon request. Please contact us at the following address:  
 7F VITA Commune  
 4-72 Sekido, Tama City, Tokyo, 206-0011  
 Tel: 042-355-2118 Fax: 042-355-2104  
 E-mail: tic@kdn.biglobe.ne.jp  
 URL : https://www.tic-tama.jp  
 Twitter: https://twitter.com/tic\_office  
 Published by: Public Relations Division  
 Representative: Tsutomu Mogami  
 Editor : Kayoko Takeuchi  
 Translations : Amanda Wade  
 Issued October 10, 2022

## Focusing on making city information multilingual and understanding the needs of foreign residents

An interview with Tama Mayor Hiroyuki Abe (August 8, 2022)

Tama City International Center (TIC) PR Division: Takeuchi, Wu, Mogami

- Mogami ▶Thank you for taking time out of your busy schedule to meet with us today.  
Now that you are in your fourth term as mayor of Tama, what has changed and what are you planning to implement in terms of policies for foreign residents, including their participation in municipal government?
- Mr. Mayor ▶I'm not sure where to begin, but there has been significant change over the past decade as a result of inbound tourism. For its part, the city has worked to install Wi-Fi hotspots in places such as Tama Center Station so as to make it easier for foreigner visitors to obtain information as part of our efforts to address the influx of inbound visitors. In addition, since the beginning of the year we have installed electronic bulletin boards and, with the cooperation of TIC and in response to the coronavirus pandemic have made administrative documents and guides available in seven languages: English, Chinese (simplified and traditional), Korean, Vietnamese, Tagalog, and simple Japanese. Tablet interpreters were also introduced in June of this year and training sessions provided for staff members on using simple Japanese.  
It was with the utmost regret that we were forced to cancel the events planned with Iceland for the Tokyo Olympics and the exchange with Taiwan's badminton team. Since 2020, we have been busy dealing with the coronavirus pandemic and City Hall is extremely grateful to TIC for its provision of information for foreign residents, including multilingual translations of vaccination information and the publication of articles on disaster prevention, garbage separation for mobile batteries, and other precautions.
- Takeuchi ▶There are complaints that TIC is not able to provide English-language services at city hall regarding the views, behaviors and needs of foreign residents in the city. Additionally, the 35 Japanese language classes are woefully inadequate even for the elementary and junior high school application guidance that TIC provides under contract to the city. Does city hall plan to conduct a survey on the views, behaviors and needs of foreign residents in the future?

- Mr. Mayor ▶ We are planning to conduct a questionnaire survey of all foreign residents in Tama as a means of gaining a clear picture of the current situation, including any problems foreign residents face in day-to-day life and their children's studies. Tama has pledged to leave no one behind, so the city must strive to ensure that this policy also encompasses our foreign residents.
- Wu ▶ Some foreigners struggle to communicate successfully on their own due to language difficulties and do not understand what is being said to them. It would be easier to provide advice and consultation if we were able to contact them in English by email.
- Mr. Mayor ▶ Garbage separation rules, for example, are perplexing even to Japanese people, and it can prove difficult to convey these rules to newly-arrived foreigners. Since, however, the city receives resident and property taxes from all residents, we need to provide explain these rules in detail so as to ensure all our residents understand them. Moreover, since city hall has a vertical chain of command we are not in a position to provide an immediate response to all inquiries. For foreign language inquiries, we ask that people use the table interpreter first, but we are also considering providing email support.
- Mogami ▶ Turning now to the positioning of TIC, similar organizations in other cities and towns across the nation receive significant support from their local governments in responding to the needs of foreign residents and the provision of international exchange programs. TIC, however, is run solely by volunteers. What are your feelings on this matter?
- Mr. Mayor ▶ Tama City is also involved in a number of international exchange programs, but we rely on the efforts of TIC members when it comes to gaining a better understanding of foreign residents in the city and to act as an intermediary for City Hall. TIC is undoubtedly a feather in Tama's cap.
- Takeuchi ▶ I attend the meetings of a liaison committee of international exchange groups run by the Tokyo Metropolitan Government that includes the international exchange associations of Tokyo's wards and cities. All these groups are involved with their municipal government agencies and the volunteers are separate from administrative staff. At TIC, however, the secretariat does all the administrative work and, in addition, its volunteers are responsible for gathering literature, making speeches, and doing the accounts for the Japanese language seminars we provide. While that can be fun, TIC is not located within city hall so it is difficult for us to implement disaster prevention measures. In the early days, a city representative attended regular meetings of our special services department, listened to TIC volunteers and presented a budget, but since 2005 all of that work has been left to TIC. It is very

difficult to secure staff and we would like the city to consider appointing a bureau chief to work with the volunteer staff here at TIC.

Mogami ▶As you say, Mr. Mayor, it is a wonderful thing to be a volunteer organization, but as the numbers of foreign residents grow and our workload increases, it will difficult for the organization to survive with volunteer staff alone. I would very much like to see city personnel involved in the management of this project, but what is your opinion, Mr. Mayor?

Mr. Mayor ▶It is true that the city is indebted to everyone at TIC. In some cities with a large number of foreign residents, all services related to daily life are provided by the municipal government. It goes without saying that this is not a problem that can be dealt with solely by volunteers; as multiculturalism and diversity become more commonplace, Tama City must also look to providing similar services. In Tama the number of neighborhood associations is particularly low, which means that foreign residents are more likely to become isolated within the community and the City must give serious consideration to providing support. As a major initiative in my fourth term in office, I am committed to addressing climate change issues and to realizing a community-inclusive society, and I believe that we will need to introduce a system of community representatives to promote these measures. This will naturally include support for our foreign residents.

Takeuchi ▶ On a different tack, Tama has concluded a memorandum of understanding on friendly and cooperative relations with Iceland. How do you plan to promote this in the future?

Mr. Mayor ▶Starting last year, we have been holding an 'Iceland Week' in Tama Center. The Icelandic Ambassador was also invited to give a lecture at Sakuragaoka Community Center. Looking ahead to the coming year and beyond, we hope to continue deepening ties with Iceland by showcasing photographs and books from Iceland and selling Icelandic specialties such as lamb and Ísey SKYR, a dairy product that is unique to Iceland, in Tama Center.

Mogami ▶Conversely, what information is being transmitted to Iceland about Tama City?

Mr. Mayor ▶The Japanese ambassador to Iceland has made presentations to government officials on Tama. When all is said and done, the population of Tama is just 340,000, so our hope is to convey something of life in this city to the people of Iceland. We are also hoping to setup some form of online interaction for children with the help of school boards here and in Iceland.

- Takeuchi ▶Iceland and Japan have much in common: both are volcanic countries and in both nations citizens are able to drink water straight from the tap, which definitely helps to make Iceland feel more familiar. I am hoping to find an opportunity to organize a children's visit to the Icelandic Embassy.
- Wu ▶ Many parks and apartment complexes in China have installed outdoor fitness equipment to make it easy for elderly residents to exercise. Most of the playground equipment in Tama parks is designed for children. It would definitely be good to see some equipment catering to the exercise needs of the elderly in Tama Central Park and other places.
- Mr. Mayor ▶Outdoor fitness equipment has been installed in nine locations in Tama, including Toyogaoka Minami Park and Kotta Kaidori Fureai Square. We have received requests not only for outdoor fitness equipment, but also for basketball courts and rock-climbing facilities for children, and we aim to create unique parks whilst listening to the opinions of all our residents. We are also planning to make Tama Central Park an inclusive park where people with disabilities and small children can play, as well as a park that utilizes the existing wooded areas.
- Wu ▶Tama City has one of the highest percentages of green spaces in Tokyo, so we are looking forward to seeing parks where everyone can enjoy a range of different activities.

Takeuchi, Wu, Mogami

Thank you for talking the time to talk with us today, not only about the City's support for its foreign residents but also about TIC and the various aspects of foreign exchange.